

私たちの歴史
SHOIN点描



大学本館・学園本館が相次いで完成

昭和42(1967)年に学園創立50周年を迎えるにあたり、半世紀近くたった校舎には傷みが顕著になり始め、生徒・学生数の増加にも対応しきれなくなっていました。さらに、世は東京オリンピックの開催や東海道新幹線の開通、大阪での日本万国博覧会の開催など経済成長・生活様式の近代化の直中にあり、こうした周辺環境の変化にも歩調を合わせる必要が生じてきました。そこで、昭和30年代の後半から40年代前半にかけて、5ヵ年計画として校舎の中層化と鉄筋化を遂行。37年3月の西体育館(現在の大学体育館)竣工を皮切りに、41年3月に大学本館北棟、翌42年7月大学本館と学園本館が相次いで完成し、同時に、築後30年が経過した講堂(現在の学園会館)の拡張・改装も行われました。大学本館北棟と大学本館、学園本館は、地下1階・地上5階建てで、総延べ床面積2万平方メートル超の大規模なもの。これらの校舎を含め、この5ヵ年計画で現在の小阪キャンパスの礎が築かれました。

1962 校舎の近代化と拡充に着手

くすのき



樟蔭学園報 Vol.158

大阪樟蔭女子大学・大阪樟蔭女子大学短期大学部・樟蔭高等学校・樟蔭中学校・大阪樟蔭女子大学附属幼稚園



インテリアデザイン学科の学生たちによるガーデニング(小阪キャンパス)

はばたけ、知性。



ホームカミングデー 10月
11日 開催……………11

CLUB NAVI ●高校吹奏楽部……………7

はぐくむ心 ●中学校教頭松尾隆之……………7

レポート ●[財産管理の基本]勝田泰久……………1

SHOIN LABO ●[知覚心理学に関する研究]仲谷兼人……………3

こもれびの窓 ●英語レッスン教室主宰南野佳美……………5

NEWS ●教職員と学生等の活動報告……………8

INFORMATION ●参加イベントのお知らせ……………11

we are Now ●各校行事など……………13

平成19年度決算概要報告……………17

SHOIN点描 ●1962年校舎の近代化と拡充に着手……………19



勝田泰久

1942年生まれ。早稲田大学第一法学部卒業後、大和銀行に入行。1991年には大和銀行の取締役に就任。その後、大和銀行頭取、リそなホールディングス社長、リそな銀行頭取などを歴任した。2005年、大阪経済大学経営情報学部教授に就任。今年（2008年）の7月26日には学校法人大阪経済大学の理事長に就任。2007年10月より本学ライフプランニング学科の客員教授を務める他、各地で金融に関する講座を行なっている。

「金利感覚」を身につける努力をしてください。
この積み重ねが預金をする上で一番手堅く大切なことです。

今年の学芸学部公開講演会は、ライフプランニング学科が中心となり「財産管理の基本」というテーマで行なわれました。前半は、元リそな銀行頭取で本学の客員教授でもある勝田泰久氏による講演、後半はファイナンシャルプランナーでありフリーアナウンサーでもある魚住由紀氏との対談が行なわれましたが、今回は勝田氏による講演の一部を紹介いたします。

「預金」の比率が高い日本

今の日本人の個人金融資産（預金・投資信託・保険・株式等）のうち、約50％は銀行に預金として預けられており、株式投資・投資信託等は約17％です。この比率を他国と比べると、アメリカでは預金が約13％、投資が約45％です。その他の欧米諸国と比較しても、日本人は大変「預金」の比率が高い国民であると言えます。その差は「国民性の違い」と言われていますが、本当にそれだけでしょうか？

例えば、日本の2001年の投資率はわずかに9％でした。しかし、当時の政府が「貯蓄から投資へ」を合言葉に、銀行窓口でも株式や投資信託を取り扱えるように働きかけたことに加えて、あまりに低い預金金利も影響して、預金から投資へと踏み切る人が多くなりました。その結果、現在の投資率は約2倍の17％程度まで上昇しているのです。

このことをみると、日本の投資率が低かったのは、国民性の問題だけではなく、経済を取り巻く環境の違いが原因ではないかと思います。

「とりあえず預金」という考え

しかし一方では、日本人に「とりあえず預金」という感覚が根付いていることも事実です。それは、戦後、政府は銀行を保護する政策をとり、銀行が倒産するという危機感がなかったことが影響しているでしょう。

また、私が銀行に入行した昭和40年ごろは、定期預金の金利は年5.5％でした。仮に100万円を預ければ、1年で5万5千円の金利が受け取れる時代だったのです。今では、全く考えられない話です。このような状況であれば、預金はお金を「守る」ためのものではなく、「増やす」ためのものと考えられ、「とりあえず預金」は正しい選択だったのかもしれませんが。

しかし、平成にはいると大きく状況は変わります。平成の大恐慌が起り、銀行がつぶれるという



ことが現実のものとして見えて

きたのです。金融不安が高まる中で、銀行の不良債権処理のため、あるいは企業の過剰債務処理のため、金利を低く抑える政策がとられるようになり、金利を取り巻く状況は大きく変わってしまいました。

結果として銀行の経営も安定してきましたが、低金利の下でも「とりあえず預金」と考えている人々が依然として多く、銀行はそのような人々の預金に支えられ、日本経済がここまで支えられてきたと言えるでしょう。

「金利感覚」を大切に

預金をする上で大切なことは、主婦の皆さんが野菜やガソリンの値段に敏感になっているのと同じように、金利の情報にも敏感になっていたきたいということです。新聞やテレビ、インターネットなどから情報を得ながら、鋭敏にそれらと比較して行動に移していただきたいと思います。今は、普通預金も定期預金も非常に低い金利ですが、少しでも多くの金利がつくように、マメさ・熱心さに加えて粘り強さを持って情報を集め、行動する。これが「金利感覚」です。この小さな積み重ねが一番手堅く大切なことなのです。お金持ちの人々には、少しの金利や手数料の変化に敏感な方が多いことも事実です。そのあたりに無頓着だと財産は残らないものなのかもしれません。毎月の少しずつのわずかな金額の積み重ねが、気づいたときには大金になっているのです。その積み重ねが財産を大きくする大切な基盤となるのです。

皆さんにお伝えしたいのは、どんな状況であっても金利の感覚を身につける努力をして欲しいということです。

一つのかごに卵を入れるな

日本では元来、「働かざるもの食うべからず」「額に汗して働け」といったような勤労観があります。また、その結晶であるお金を大切にする、大切に守っていくという感覚があり、それは日本人の美徳の一つでもあると思います。子供のため、



家族のためにこつこつ積み立て、少しずつでも増やしていく。これは、長年かけて日本人が守ってきた大切な感覚であると感じています。一方で、投資の場合は元本割れをするというリスクが常にあります。「一つのかごに卵を入れるな」という言葉があるように、投資を考える上ではリスクを分散することが大切です。長年務めた銀行マンでも、円とドルの行方や株値の行方は分からないのです。ましてや素人にはもっと分からないものです。為替や株値は常に変動するものなので、それに一喜一憂せず、リスクを分散しつつ長期的な視点で大きく構える必要があります。

次に預金と投資のバランスについて考えてみましょう。毎日の生活に必要なお金や、直近に必要なことが分かっているお金は、確実な普通預金に預けるべきです。子どもの入学資金や車の購入代金など、必要となるのが少し先のお金は定期預金へ。そして、今は特に使う予定がなく、余裕のある資金があるのであれば投資信託や株式などで増やす楽しみを持っていても良いのではないのでしょうか。このときも、少しずつ運用し、それぞれの商品のリスクを勉強していきながらお金を増やしていけば良いと思います。大切なのは、それぞれの家庭の状況に応じて、預金・株式・投資信託などをバランスよく持つことなのです。

欲は最大の敵である

最後に、皆さんには「欲は最大の敵である」ということを知っていただきたいです。欲を出してハイリスクの商品の比率を上げることは大変危険です。また、古くは豊田商事の事件から最近の円天の事件まで、個人投資家からお金を騙し取る詐欺事件は後を絶ちません。あまりに旨い話には必ず裏があり、このような話は意図的に聞き流すことが必要です。低リスクハイリターンなんて旨い話はありえないのです。財産を増やすには、努力と忍耐が必要です。くれぐれも、欲は大敵です。

これからの予定

インテリアデザイン学科公開講座①
「一瞬も 一生も 美しく」―暮らし・空間・コミュニケーション―
日 時：10月4日（土）13:30～16:30
講 師：檜原 由比子氏（株式会社資生堂宣伝制作部クリエイティブディレクター）
郷力 憲治氏（本学教授）
受講料：無料／お申し込み：必要

第9回樟蔭ファッションセミナー
「現代日本における伝統染織工芸の現状」
日 時：10月18日（土）14:00～16:00（開場 13:30）
講 師：富山 弘基氏（京都伝統染織学芸会主宰、『月刊染織α』元編集長）
受講料：無料／お申し込み：必要

国文学科・日本文化史学科・地域文化センター公開講座
「謎の古代寺院・平城京礎城寺（紀寺）を考える」
日 時：11月8日（土）13:30～15:30
講 師：岩佐 光晴氏（文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官）
佐久間 貴士氏（本学教授）、堀 裕氏（本学准教授）
長谷川 伸三氏（本学非常勤講師）、荒武 賢一郎氏（本学非常勤講師）
受講料：無料／お申し込み：必要

インテリアデザイン学科公開講座②
「ささやかですが、大切なこと」―暮らし・道具・インテリア―
日 時：11月22日（土）13:30～16:30
講 師：石村 由起子氏（「くるみの木」オーナー、空間プロデューサー）
郷力 憲治氏（本学教授）
受講料：無料／お申し込み：必要

上記各講座は小阪キャンパス内に開催いたします。
各講座に参加を希望される方は、大学ホームページまたはハガキ・FAX・メールにて、①住所②氏名（ふりがな）③電話番号④参加希望講座名を明記のうえ、お申し込みください。
〒577-8550 東大阪市菱屋西4-2-26 大阪樟蔭女子大学 学術振興課
TEL:06-6723-8237 FAX:06-6723-8348 E-Mail:gakuiyutsu@osaka-shoin.ac.jp

※上記の各催しには駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。

平成20年度大阪樟蔭女子大学・短期大学部オープンカレッジ文化講座
『子どもの社会性を育てるためには～人と関わる力を育てる～』
日程および講師：（各回10:30～12:00の開催）
10月18日（土） 「子どもの社会性を育てる―教育民俗学からの知恵―」
中谷 彪氏 香芝市教育長、大阪教育大学名誉教授（元学長）
10月25日（土） 「社会性育成から見た学校体育の役割―教育としての運動・身体教育からスポーツ文化の入り口としてのスポーツ教育まで―」
佐橋 由美氏 教養教育准教授（専門：余暇行動学）

11月1日（土） 「『教育現場の今』を考える」
粕田 保氏 香芝市学校支援地域本部地域コーディネーター
11月8日（土） 「社会性の育成と団体への所属」
中井 歩氏 人間関係科准教授（専門：政治過程論・公共政策論）
11月15日（土） 「社会性と多様性 比較からの対話」
湯浅 慎一氏 教養教育教授（専門：哲学）、岩崎 正子氏 心理学科教授（専門：臨床心理学）

場 所：関屋キャンパス
受 講 料：無料
お 申 し 込 み：大学ホームページまたはハガキ・FAX・e-mailにてお申し込みください
（お電話でのお申込は受付できません）。
お申し込みの際は、①住所②氏名（フリガナ）③電話・FAX番号
④e-mailアドレス（お持ちの方）⑤参加希望講座名を明記してください。

締 め 切 り：各講座実施前日（金曜日）まで
キッズルーム：要申し込み（申込締切：各講座実施日の4日前（火曜日）まで）
主 催：大阪樟蔭女子大学人間科学部学術研究会
共 催：香芝市教育委員会
お問い合わせ：〒639-0298 奈良県香芝市関屋958
大阪樟蔭女子大学 学術振興課（関屋キャンパス）
TEL: 0745-71-3168 FAX: 0745-71-3141 E-Mail:s-gakuiyutsu@osaka-shoin.ac.jp

上記の講座はHPからもお申し込みいただけます。 <http://www.osaka-shoin.ac.jp>



大阪樟蔭女子大学 人間科学部 心理学科教授
 (*来年度より新設される心理学部の学部長に就任予定)
 京都大学大学院教育学研究科博士課程教育方法学専攻単位取得満期退学。教育学修士。
 1983年日本学術振興会奨励研究員、84～87年京都大学助手、91～97年樟蔭女子短期大学助教授、
 97～2001年同教授、01年～現在大阪樟蔭女子大学教授、04年～現在同大学院教授

知覚心理学的に言えば、リアルに見えていない「錯視」を間違いとはいえない

実際に見えている月の大きさは、伸ばした腕の指先に持った五円玉の穴の大きさ。それなのに人間は、もっとずっと大きなものとして認識しています。また遠近法は、平面に書かれた絵を奥行きのあるあたかも三次元の表現として認識させます。これらは知覚心理学である程度は説明できますが、視覚情報と人の心の動きとの関係は、まだまだ解明されないものが潜んでいます。だから仲谷兼人教授が研究する知覚心理学は人生を豊かにして、しかも面白いのです。

視覚が惑わされる エイムズの部屋の謎

心理学は、「人の心の働き方」を学ぶことであり、またその「心の現われとしての行動」を理解することです。とはいえ、とっても幅の広い学問です。
 大まかに分けると、心の現われとしての行動に何か問題があれば、それをよい方向に持っていこうとするのが臨床心理学であり、教育の場面で、より良く、楽しく、効率的に理解を深めるため研究をするのが教育心理学。そして、子どもが育ち、大人に成長し、年齢を重ねていずれ死に至るまでを心の面からとらえるのが発達心理学です。
 その他の大きな領域として、社会心理学があります。人間は集団を作って生活し、必ず人と人との関わりの中に生きています。そのなかで起こる現象をみる学問です。
 以上は応用的な分類ですが、その基盤となる人間の心に共通する一般的な法則を研究するのが基礎心理学です。
 その基礎心理学のなかで、私が専門的に研究しているのが「知覚心理学」です。見える、聞こえるといった知覚と心の間を研究して



エイムズの部屋／遠近感覚を惑わす部屋のつくりのせいで、等距離の位置にいる大人と子どものように見えるふたりですが、実はほぼ同じ身長で一人は近くに、もう一人は遠くに立っています。



います。知覚の中には、「聴覚」も「視覚」もあります。たとえば音楽を分解するとひとつひとつの音ですが、その音を組み合わせると、なぜ楽しい気分や悲しい気分など、さまざまな印象を与える音楽になるのか。これを研究するのは「聴覚」の心理学ということになります。私の場合は、主に「視覚」の心理学を研究しています。「錯視」という言葉を聞いたことがありますか？これは、たとえば本来同じ長さのものが、長く見えたり、短く見えたりすることです。なぜそんな現象が起こるのか。これを具体的に知る実験装置が、オープンキャンパス用に関屋キャンパス内に作られた「エイムズの部屋」です(左写真参照)。
 同じような身長の子供ふたりが部屋に入ってもらい、壁に開けられた穴から覗くと、穴からの距離は同じに見えるのに、体の大きさがまる

で違って見えます。実際は左の人は、右の人より遠くに立っているのですが、「エイムズの部屋」の奥行きも高さも歪んだ構造によって等距離の場所に立っているような錯視が起きているのです。

絵画に潜むものを読み解く 芸術心理学

この知覚心理学研究の延長線上にある「芸術心理学」の研究もしています。知覚心理学は基礎心理学のカテゴリーなのですが、芸術心理学は応用心理学のひとつです。1枚の絵には、それを描いた人の世界の見方が反映されています。たとえば古代の人が洞窟の壁に描いた壁画には、当時の人の服装や使っている道具や家畜、また狩りや獲物になる動物などが描き込まれています。この絵

から当時の人たちの生活ぶりを読み取るのも、芸術心理学の第一歩です。
 洞窟壁画以後、人類はさまざまな絵を描いてきました。宗教的なものあれば純粹に芸術的なものもあり、それぞれの時代のテーマをそこから読み取ることができます。たとえば神様の絵や彫刻は古くからありますが、悪魔が題材になるのはずっと後のことです。このことから、昔の人は怪物や悪魔を絵にすることを恐れ、タブーとしていたことがわかります。ところが、ある時代から怪物や悪魔も題材としてよく取り上げられるようになります。ノートルダム寺院にはガーゴイルなどの魔物の彫刻がありますが、これは怪物や悪魔への恐れが弱まったことを示し、時代とともにタブーが緩んだことがわかります。
 同じく芸術心理学では、遠近法の研究もしています。たとえばギュスターヴ・カイユボットが描いた「パリの通り、雨」(下写真参照)という絵がありますが、これは二次元の平面である絵画を、三次元の立体的に見せるために多彩な遠近法が使われています。まず典型的なのは奥行きに向かって線が収束していく線遠近法、そして中央左の建物の奥を青くぼんやり描くのは、遠くの風景が青く見えることを表現法に用いた空気遠近法です。また敷石が奥に行くほど小さく見えるのは肌理の勾配といわれる遠近法です。これらの遠近法の活用により、平面である絵のなかに、奥行のある立体的な表現が可能になったのです。日



多彩な遠近法が使われているギュスターヴ・カイユボットの「パリの通り、雨」。

本の古い絵画には、雲を描いてその向こうに見えるものは遠くにあるものとみなす、約束事の遠近法があります。江戸時代の浮世絵にはこの雲の遠近法と西洋から伝わった線遠近法の両方が使われているものもあります。

遠いものを無意識にズームインして 心理的に実際より大きく見る

写真は事実をありのままにとらえますから、近くのは大きく、遠くのは小さく写ります。しかし、人間の目は必ずしもそのように見えていません。遠くのものでも大きく見えていることがあるのです。これも錯視の一種です。しかしこれをもって、人間の目が間違っているとは簡単には言えないのです。
 我々には心があり、心と視覚は密接な関係があります。ですから、心理学的に言えば錯視が起きているほうが正しいといえます。たとえば、何かに注意を引かれると人はそのものをズームインして見えています。これは我々の祖先が森や草原で生きていた時代に、動くものが自分にとって危険かどうかを判断するために、敏感に反応するための機能です。つまり錯視が起こったほうが、危険を回避できる確率が高くなり、生き残る能力が高まったのです。「月の錯視」という現象があります。お月様は実際の大きさより、はるかに大きく見えているのです。歌では「盆のような月が」などと表現されますが、実際は月の方角に腕を伸ばし、その指先でつまんだ5円玉の穴の大きさにしか見えていません。なぜそれ以上に大きく見えるのか。線が長く見えたり短く見えたりする幾何学的錯視は、せいぜい2割程度の範囲です。しかし月の錯視は10倍、50倍、ときには100倍の大きさに見えることもあります。とくに絵に描かれた月は本当に大きい。これも私の研究テーマのひとつで、月が描かれている絵を大量に集めているところです。まだ結論は出ていませんが、我々の記憶の中に、大きな月が刷り込まれているのではないかというのが今の仮説です。

幼い頃の私は一人遊びが好きでした。幼稚園の頃は、皆が輪になってお遊戯している真ん中で、ひとり積み木を独占して遊んでいましたし、家でのお気に入りの遊びは、鏡を手にとって、鏡に映ったものだけを見ながら歩くことでした。後に知ったのですが、この鏡遊びは心理学では逆転メガネという古典的な実験でした。また夜道を歩いていると月と一緒に移動するのに「なんで月がついてくるんやろう、不思議だなあ」と考える子どもでしたが、これも知覚心理学では運動視差の問題として知られています。
 だからといって私は初めから心理学を選んだわけではありません。大学は京都大学の薬学部に入ったのですが、途中で教育学部に転部しました。それほど深いわけがあったのでもなく、何か面白いことはないかなあ、という感じでした。70年代というのは、ある種価値観が崩壊していて、そんなことが許される時代だったようにも思います。
 当時の教育学部は、河合隼雄先生がまだ若手として活躍中でした。そこで菅坂良二先生と出会い、知覚心理学を勉強することになりました。月の錯視はこの先生のテーマを引き継いだものです。いま思えば鏡遊びが好きだったり、月が追いかけてくるのを不思議に思ったりする子どもでしたから、心理学を専門にすることになったのも自然な成り行きかもしれません。人の心は謎に満ちています。心理学のいちばんの魅力は、その心の謎に迫り、解明すること。いまでも実に面白い学問だと思っています。

大阪樟蔭女子大学の人間科学部心理学科は、来年度から心理学部へと発展します。学科は臨床心理学科、発達教育心理学科、ビジネス心理学の3学科。学部長には仲谷兼人教授が就任予定です。「3学科それぞれ充実した内容ですが、ユニークなのは日本で初めてのビジネス心理学科です。よく『○○の法則』などというタイトルのビジネス本が出版されますが、この多くは心理学がベースになっています。心理学を学んでおくと、人間関係の知識が深まり、会社で働くにも、起業や経営など、いろいろなビジネスの現場で役に立つと思います」



南野佳美

なんの・よしみ
家庭派遣英語レッスンNANNO&Company主宰

大阪出身
1984年・大阪樟蔭女子大学英米文学科卒業

中学、高校、大学と樟蔭での学生生活を送る。小学生の時に聴いた音楽がきっかけで英語に興味をもちはじめ、高校2年生から、英会話レッスンを受講。大学在学中は本格的に英語を学び、中高校生に家庭教師として英語を教え始めた。大学3年生の夏休みには、念願であったアメリカでのホームステイも経験。大学卒業後は外国人の患者が多い大阪の歯科に、アシスタントとして勤務、その後、通訳養成学校に通いながら、国際会議の事務局や商談での通訳、そのほかにもさまざまなイベントでも通訳などを行なった。1987年にはインターンシップ・プログラムに参加、テキサス州の学校で日本の紹介を行ない、1991年から5年半、NTTの関連会社でアイルランド人とアメリカ人の通訳兼秘書を務めた。

子どもたちに英語を楽しみながら親しんでもらいたい、という思いから2004年に英語レッスン業務のNANNO & Companyを設立。



現地のものに触れ、子どもたちの感性を育てるために、教材などは外国の輸入版を使用している。

地元東大阪の鋳物工場の「お嬢さん」は 中学からの樟蔭育ちで、英語とアメリカが大好き

小学生の頃に聞いたアメリカンポップスがきっかけで、英語とアメリカに魅せられ、樟蔭中学、高校、大学英米文学科で英語を学び続けた南野佳美さんは、現在、英語圏のネイティブスピーカーを家庭に派遣し、親子でレッスンを受けるというユニークな英語教育を行なっている。英語大好きの思いを貫き、夢を育てている南野さんにお話をお聞きました。



「私はバイリンガルですが、話せるのは英語と大阪弁です。日本人というより大阪人という意識のほうが強いですね」といって笑う南野佳美さんは、中学、高校、大学と根っからの樟蔭学園育ち。

大学卒業後、通訳、外国人ビジネスマンの秘書、アメリカのデザイン／マーケティング・コンサルティング会社大阪支店での通訳兼オフィスマネージメントなど英語関係の多彩な仕事を経て、現在はネイティブを家庭に派遣して英語レッスンを行うNANNO&Companyを主宰している。

小学生で英語に目覚め 樟蔭中高、英米文学科で学び続ける

「学校までは電車で二駅。大学時代は原付バイクで通っていました」

実家は、東大阪で自動車部品などを製造する鋳物工場を経営。母親もその姉妹である3人のおばたちも皆が樟蔭の卒業生である。南野さんも、ものごころつく前から「中学校から

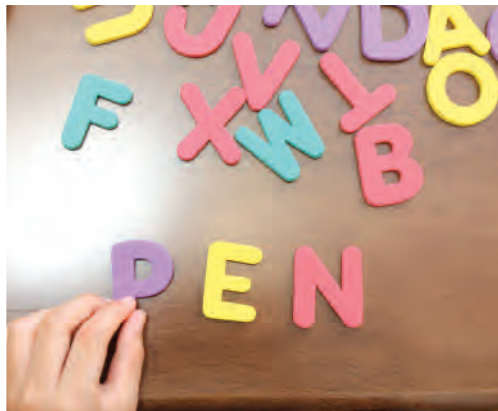
は樟蔭に行くんやで」といわれて育った。そんな河内の工場の「お嬢さん」が、英語に目覚めるのは早かった。

「英語の前に音楽ありきでした。小学校低学年からグループサウンズで音楽に目覚め、5年生で当時のジャニーズ系のスターだったフォーリーブスのファンになりました。彼らがステージで、アメリカのモンキーズやカーペンターズの曲を訳詩で歌うのを聴き、英語の原曲を聴きたくなり、ラジオから曲をカセットテープに録音したのが英語との出会い。ですから、私の英語はアルファベットより先に音ありきでした。たぶんこれが、いま英語の音を大切にしながら子どもの英語教育に携わっている原点なのだと思います」

中学3年の創作ダンスでは、アメリカンポップスを使って振り付けを考え、チームをリードした。きっかけは音楽だったが、英語、そしてその向こうにあるアメリカに魅了され、中学、高校と熱心に勉強し、英語の成績は常にトップクラスだった。

「そのかわり数学は、苦手科目でした。大学進学時も、高校の数学の単位取得が怪しかったのですが、英語の好成績でオマケしてもらったのではと思っています（笑）」

大学入学後は、本格的に英語に専念できる



アルファベットのパズルを使用して単語を学習。



天王寺動物園とのコラボレーションとして、『動物園de英語』を定期的に開催。動物への興味を英語と結びつけたユニークな英語レッスンは、マスコミから取材を受けるなど、社会からも注目されている。

ことがうれしく、自分の勉強はもちろん、英語の家庭教師のアルバイトに力を入れた。

「篠田時彦教授との出会いが、私のポップカルチャー中心だったアメリカへの興味を、文化、歴史、習慣など多面的なものに広げてくれました。篠田ゼミでの卒業論文は先生の励ましもあり、日米の比較文化をテーマに、タイプライターを使って英文で書きました。論文制作に時間がかかり、提出日の締め切り1時間前に学校から連絡を受けて、バイクに飛び乗って届けたことを覚えています」

大学卒業後は、英語を活かせるさまざまな仕事をしながら経験を積んだ。またインターンシップ・プログラムに参加し、ホームステイをしながら3カ月間、テキサス州デル・リオの小学校で日本の文化を紹介する活動もした。「これは本当に勉強になりました。メキシコ国境に近く、スペイン語しか話せない移住者の子どもたちに、アルファベットそれぞれが持つ発音のルールに沿って英語を教えるフォニックスが採用されており、これを現地で実際に経験できたことは、現在の仕事にも役立っています」

英語は大切だが幼児期の 極端な英語教育には危惧を抱く

南野さんがNANNO&Companyを立ち上げたのは、2004年3月のこと。

「自分が大好きな英語を、子どもたちに楽しみながら親しんでもらいたい、というのがいち

ばんの目的です。しかし、家庭へ外国人講師を派遣するのは、子どもだけでなく両親も一緒にレッスンを受けてもらいたいからです。月に数回、レッスンの時間だけ英語にふれるのではなく、レッスン後も英語を話題にして親子でコミュニケーションを図ることで、子どもの英語への興味は持続します」

一方で、幼児期に周囲は英語ばかりという環境に常に子どもを置く、極端な英語教育には危惧を抱いている。

「自分が英語を話せないことに強いコンプレックスを抱き、これからは英語を話せるように育てなければと、親が過剰に英語を押し付けると、いい結果になりません。外国に行くときよくわかるのですが、言葉とその背後にある文化は人間のアイデンティティの基本です。国際語に等しい英語に親しむ環境を作ってあげることは大切ですが、子どもが日本人としてのアイデンティティを育てることを妨げると、よりどころを持たない、自分に自信が持てない人間に育つ危険をはらんでいます。英語をピアノやバレエ、野球、サッカーと同じ習い事のひとつとして考え、子どもの興味が自然と育つようにサポートすることが大切なことだと思います」

英語を愛し、英語教育に携わっているからこそ南野さんのこの言葉は重い。英語とアメリカを愛すると同時に、大阪そして樟蔭で育んだアイデンティティが、南野さんの生き方を支えている。

卒業生の方々のご活躍の様子をお知らせください。

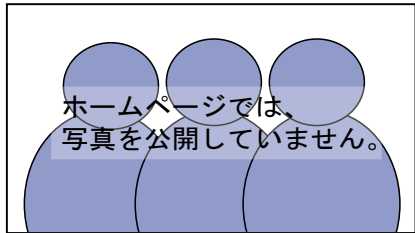
さまざまな分野でご活躍されている卒業生の情報をお寄せいただき、みなさまのお力をお借りして、この「こもれびの窓」で幅広い卒業生の姿をお伝えしていきたいと思っています。身近でご活躍の卒業生の様子をぜひとも樟蔭学園法人本部企画広報室までお知らせくださいますよう、お願いいたします。●TEL 06-6723-8152●FAX 06-6723-8263

CLUB NAVI 1

高校

吹奏楽部

今回は、高校吹奏楽部を代表して、部長の●●●●さん(3年秋)、副部長の●●●●さん(3年月)・●●●●さん(3年春)にインタビューしました。



左より副部長の●●●さん、部長の●●●さん、副部長の●●●さん

現在、部員は約30名。昨年度には、初めて樟蔭単独の定期演奏会を行い、今年は東大阪市市民会館にて開催しました。学内でのイベントのほか、吹奏楽コンクールにも出場し、その他市民イベントにも数多く出演。夏休み・冬休みなどでも、朝から夕方まで元気が

んばっています。

Q クラブの雰囲気はどうですか？

A みんなとても明るくて楽しいし、学年関係なく仲良しですね。合宿では、先輩後輩が一部屋に混じっていても、お菓子パーティーとかして楽しいですし、毎年全員で一緒にお風呂に入ります！それが面白くて、みんなではしゃいでますよ。

Q これまでの一番の思い出は？

A 定期演奏会ですね！半年かけて準備する予定が、今年はほかのイベントで延び延びになって、気づいたらもう3ヶ月前に迫ってきてて、びっくりしました。慌てて選曲をしたのですが、決めた曲の譜面が全然見つからなくて、また曲を変更したりして、全部の曲がそろったのが、結局本番の2ヶ月前でした…。そこから、必死に練習して、先輩たちも教えに来てくれたりして、何とか曲を上げていったのですが、顧問の増田先生は私たちの自主性に任せてくださる先生なので、自分たちでがんばって作り上げていくのが



楽しかったです。

Q 吹奏楽をやっていて、大変だったところは？また、一番楽しいところは？

A 毎年参加している「出初式」は、真冬の寒い中を外で演奏するので、ちょっと辛いです…。今年は特に、吹雪いていたので、手がかじかんじゃって指が回らなくなったりして、大変でした。でも、拍手をもらったりすると、とても気持ち良いです。私たちの演奏を、お客さんが楽しそうに聞いていると、反応で分かるので、すごく嬉しくなります。
吹奏楽部のみなさん、これからも素敵な演奏を聞かせてくださいね！

NEWS

国家試験

管理栄養士国家試験 合格率 84.5% に達しました！

2007年度の国家試験（平成20年3月23日実施）では、大学・食物栄養学科の新卒生71名が受験し60名が合格しました！合格率にすると84.5%となり、本学の過去最高値を更新しました。この84.5%という数値は、全国全体の合格率31.6%を大きく上回り、また、管理栄養士養成課程の新卒者合格率の80.6%も超えるものです。管理栄養士専攻では、卒業時には全員が国家試験を受験して合格できるよう、管理栄養士演習、模擬試験開催、そして、直前特訓講座など、教職員一丸となりサポートします。さらにきめ細やかな指導を目指し内容の充実を図っていきます！



イベント

岡山にて「樟蔭のつどい」を開催！

中国・四国地方の卒業生と樟蔭をつなぐ「樟蔭のつどい」第4回目のイベントが、岡山にて開催されました。6月21日、一昨年と同じ会場（アークホテル岡山）にて開催され、午前の部に食育フォーラム「心と体を育てる大切な食事～子どもの食育と大人の食育を考える～」が行なわれました。本学卒業生で家庭料理研究家の土井信子氏による講演と、岡山県栄養改善協議会会長の杉本睦子氏、地元の有機農業生産者の香西達夫氏をパネリストに迎え、コーディネーターを本学准教授の熊代千鶴恵氏が務め、パネルディスカッションが行なわれました。今大変注目されているテーマに、地元の食育関係者の方も大勢参加され、約200名の方にご参加いただくことができました。

午後から行なわれた卒業生と学園教職員との懇親会では、学園からは理事長をはじめ11名の教職員が出席し、お集まりいただいた20代から80代までの幅広い年齢層の卒業生40名との交流を深めることができました。教職員から現在の学園の状況について聞いたり、学園の現在の姿の写真を見るなど、久しぶりに会う同級生との語らいはもちろん、初めて会う同郷の同窓生ともすぐに打ち解けて、テーブルを囲んでの懇談は時間の経つのを



忘れての楽しいひと時となりました。また、大学主催の保護者懇談会や入試相談会も行なわれ、在学生の保護者の方々から学生生活や就職についての相談、受験生や高校の先生からは入試や大学・短大の教育内容や学校の雰囲気などについての相談が寄せられ、担当の教職員が丁寧に質問に答えていました。来年度も開催いたしますので、近隣にお住まいの卒業生の皆様は、ぜひともご参加ください。



はぐくむ心



樟蔭中学校教頭
松尾隆之
(まつお たかゆき)

【プロフィール】
1957年5月4日生まれ。
1981年、大学を卒業後に樟蔭中学校で国語科教師としての道を歩み始める。
現在は中学校の教頭を務め、学内改革を先導する重要な役割を担っている。
中学生の頃は軟式テニス部のキャプテンを務めた経験も。家庭では2男1女のお父さんである。

樟蔭育ちの宝物は、やさしい心と人なつっこい笑顔

樟蔭で国語教師になって28年目。樟蔭独特の自由な校風のもとで、教師として理想を追い続けていられるのは幸せなことです。本来の意味での母校ではありませんが、私にとって樟蔭は間違いなく第二の母校です。樟蔭の中高生の特徴は、きちんと礼儀をわきまえながらも、「明るくて、人なつっこい」ことです。高校生になると、だんだんと大人らしい振る舞いになるのですが、中学生はまだまだ無邪気で素直、旺盛な好奇心と元気にあふれています。よく他の学校の先生から「生徒は甘い顔をするにつけあがる」などという声を聞きますが、こと樟蔭に関しては、こんな考えは誤りです。生徒と教師の間には、うちとけた和やかなコミュニケーションがあります。もちろん時には指導のために厳しい顔もしますが、それはいつかのこと。すぐに笑顔で話せるようになります。こんな子どもたちの笑顔に囲まれていると、創立者の森平蔵の意図した、自ら考える力と豊かな情操を養う教育の伝統が、脈々と受け継がれていることを強く感じます。ところで、女性が社会の第一線で活躍する時代になり、本校の生徒の中にも、樟蔭女子大学だけでなく、国公立や理系への進学を望む者が増えてきました。その

思いに応え、今年から、より一層進学体制を充実させるために、中学入試時に選抜特進コースを設けました。中高一貫教育のメリットを活かして、難関大学受験への学力を身に付けるためのものです。もちろん、受験学力の向上を目指しながらも、決しておろそかにしてはならないのは、建学の精神です。なぜなら、知性ととともにやさしい心と人なつっこい笑顔こそが、樟蔭育ちのいちばんの宝物なのです。

